

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

巻頭言

日立財団 Web マガジン「みらい」編集主幹
拓殖大学 政経学部
教授（犯罪学・刑事法専攻）

守山 正

Web マガジン『みらい』創刊号特集は、「現代社会と問題を抱える子どもたち」をテーマとして、虐待、いじめ、ネット被害の問題に着目した。子どもはどの時代でも社会を紐解くキーワードであるが、こんにちの少子化にあってはさらに重要なテーマであり、子どもをめぐる取り組むべき課題は山積している。考えてみれば、現代社会において子どもは、国連子どもの権利条約が指摘したように、権利主体であるばかりでなく、次世代を担う有用な人材でもあり、その健全育成は国民、国家、社会の願いであることは言うまでもない。ところが、現代社会においては子どもの健全な成長を妨げる多くの現象がみられ、実際、子どもが苦しむ姿がしばしば報道されている。

子どもは「社会的弱者」である。動物学が教えるところによれば、とりわけヒトの子どもは動物の中でも弱小な存在であるという。他のほ乳類と比較しても、生まれたばかりのヒトの子は唯一、自力で食物をとることができず、放置すれば死んでしまうきわめて弱い存在である。このように、動物的にも際だって脆弱なヒトの子が、さらに現代社会で生き抜くのは容易なことではない。社会的強者からの虐待やいじめ、ネット社会の罠が口を大きく開けて待っているからである。

このような弱者たる子どもを保護すべき責務は第一に家庭にあるが、それが機能しない家庭にあっては、国家や社会による保護が必要である。実際、多くの法令が子どもの保護をうたっている。しかし、本特集の執筆者が指摘するように、法律の保護だけで十全にその目的を果たし得ない現実がみられる。欧米では伝統的に、子どもは公共の存在、つまり「神の子」として扱われ、親も子どもを私物化することなく、地域の子どもの安全に見守る教会などの社会的装置がみられた。社会には、この意識を高めるための博愛慈善家が存在し、宗教家とともに活発に運動した。よく知られる話として、アメリカで非行少年を救済するために設置されたイリノイ州の少年裁判所は、実は地域の母親たちの活動が実を結んだと言われる。この少年裁判所はその後、わが国はもちろん、世界中でその理念から設置された。

しかし、現代社会において、欧米でも、子どもをめぐる社会事情は大きく変化している。社会発展において人間の絆の重要性（いわゆる「社会関係資本（social capital）」）を論じたロバート・パットナム（Robert D. Putnam）の近著『われらの子ども（Our Kids）』（2016年）は、経済格差が拡大したアメリカ社会において、子どもに対する視野が狭くなり、「私たちの子ども」ではなく、「私の子ども」に変わりつつあることを指摘した。かつての地域社会がそこに住むどの子どもにも目を向け、集合主義的に育てようとした意識「私たちの子ども」が、現代では生物学的な意味での「わ

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

が子」のみに愛情や関心が限定され、個人主義的な「私の子ども」の時代に向かいつつあるという。この現象は彼の前著『孤独なボーリング』の中でも描かれており、かつては地域の仲間で楽しんだボーリングを現代では一人で興じるスポーツと化したとする指摘も社会に大きな警告を与えた。

このように人間関係が動揺する現代社会において、それでは子どもをどのように保護すべきであろうか。これを解く鍵もまた、国家や法制度の機能だけでなく、地域社会つまりコミュニティの力にもかかっているように思われる。アメリカの社会学者ロバート・ Sampson は地域のまとまりが問題解決の鍵であるとする「集合的効力性 (collective efficacy)」という概念を生み出した。この概念は、日頃は比較的紐帯の弱い近所づきあいをしている人たちも、地域がある問題に直面すると、しばしば集合的に問題解決にむけて団結することがあるという。わが国では、この概念はかつてのテレビ番組にあった「ご近所の底力」とか「地域力」などという言葉でも示されている。ただし、こんにちインターネット社会を迎え、地理的空間的に無限の広がりを見せており、たんに地域社会だけの問題解決力に依存することは難しい時代である。そこで、今後はこの問題をどのように突破するのが鍵となるであろうが、考えるべきは「子どもファースト」の姿勢を忘れないことである。